

れ、4名の発言内容を大きくまとめると、次の3つになりました。

人財(支援者)の育成について

- ・OJT(職場内研修)ベースでスーパーバイザーがトレーニングを行い、研修の機会を増やしていく必要がある。
- ・市町村レベルでなく都道府県レベルでのスーパーバイザーの育成を行い、スキルを持った人を増やしていく事が望まれる

グループホームについて

- ・特に入所施設等といった集団での生活が困難とされてきた行動障がいを伴うASD(自閉症・アスペルガー症候群)の人たちにも配慮されたグループホームが必要。
- ・多くの行動障がいについては生活環境を整える事によって解決する。

相談支援が考える生活支援について

- ・「安定して」「落ち着いて」で終わらずに「自分らしく」暮らすことにも目を向ける必要がある。
- ・挑戦や失敗を繰り返す事によって生活の幅を広げていく事が可能になる。

私が勤務する福島育成園は生活介護と施設入所支援の利用者を合わせると93名の方がご利用されています。大きな集団で支援員は交代勤務ということもあり、なかなか一人ひとりの毎日を把握しにくいのが現状です。今回の講演を拝聴し、改めて利用者様一人ひとりの生活・人生について考えました。自分の意思を伝える・決定することが難しい方は少なくありません。そのなかで私たち支援員はご本人たちが満足される暮らし・支援を提供できているのだろうか・・・現状に利用者様を合わせるのではなく、利用者様一人ひとりに現状を合わせていけるようにする。大きな集団なので完璧に、というのは難しいかもしれませんが、それでもそれぞれの方が‘自分らしく’生活していけるような支援を今まで以上に模索していかなければならないと感じました。

分科会Dコース 【高齢】に参加して わかたけ会 林 浩文

分科会Dコースの【高齢】のテーマは「高齢期こそ多様な選択肢で安心を支える」です。

高齢化社会と呼ばれる今の時代、特に障がいを持った人やその人たちを支援する側の人にとっては、とても大きな課題であり、およそ850の方が参加され関心の高さを実感しました。



午前の部では独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設「のぞみの園」 研究部 研究課 相馬 大祐 氏より高齢化・重度化における医療を含めた介護保険との関係とのぞみの園における3年間の研究発表について講演して頂きました。

65歳を超える知的障がい者の実態は、人数的に全国で約5万人と推計されているそうです。療育手帳の仕組みが1973年(昭和48年)から始まったものであり、手帳を持っていない人もまだまだ多く5万人以上いると推測されるということです。

今回の講演では、知的障がい者の高齢に伴う身体機能や認知機能の低下について、そしてその時期や原因、認知症の発症、生活の場、介護保険との関わりなどを様々なデータをもとにグラフや実際の数値を用いわかりやすく説明頂きました。

午後の部では全国手をつなぐ育成会連合会 総括 田中 正博 氏による基調講演とシンポジウムが行われました。

障がい者総合支援法が2013年(平成25年)に施行され3年後の見直し時期が来年4月に迫っています。そのような中で、現在、国で検討されている常時介護を必要とする障がい者、高齢障がい者に対する支援の在り方について詳しくお話をして頂きました。

次に行われたシンポジウムでは新潟、札幌などから4人のシンポジストの方から、実際に行われている支援やそれぞれの取り組みについてお話をして頂きました。

シンポジストからは、成年後見の制度や是非についての発表、定員18人で終末期(看取り)まで支援を行っているグループホームの発表などがありました。その中で特に興味を持った発表は、地域支援機能と居住支援機能を一体化した事業整備(地域生活支援拠点)の話題でした。

この地域生活支援拠点とは、①同一の建物(または近隣)に日中活動、グループホーム、短期入所、相談支援などの事業を組み合わせる型(多機能拠点型)、②一定エリアに同様の事業を組み合わせる展